

「原爆文学」探査⑥

南里征典『獅子は闇にて涙を流す』

坂口博

エンターテイメント小説にも原爆はよく出てくる。なかには物語展開に無理も見えるが、一概に「娯楽」だからと軽視するわけにもいかない。

今回は、南里征典の初期小説を取り上げるが、他に知られた（ここで「知られた」というのは、水田九八二郎『原爆文献を読む』に掲載された、と同義）作品には、藤村正太『原爆不発弾』（光文社、75・12）や伴野朗『第三の原爆』（スコラ、94・3↓講談社文庫、95・8）といった長篇がある。そのどちらもが、長崎と同時に投下され、不発に終わったとされる三番目の原爆を扱っている。「セルロイド製の円筒形爆弾」で、「内部に複雑な器械が組み込まれているのが透けて見え、外へツノが二本とび出している」という。「北高来郡田結村（現飯盛町）付近」と、藤村は地名も特定する。

伴野の場合は、「大浦地区の背後に聳える小高い丘陵」星取山の陸軍高射砲陣地近くの楠林。ただし、こちらではB29「ボックスカー」に随伴した「アイスマン」にも予備原爆「アンクル・トム」が積載されていて、その「アイスマン」は長崎からの帰途に、原爆とともに消息を絶つ設定となる。そこから派生した、米ソ中日のスパイ組織から政治トップを巻きこんでの活劇は、エンターテイメントならではの展開である。それはそれでいい。歴史の仮

定は、フィクションの上では、いくらでも許される。それでも、広島・長崎の原爆投下とその「効果」の現実だけは、不可逆な出来事として扱わざるを得まい。

二作にこれ以上は踏み込まないが、ただ、嵯峨根遼吉（05・11・27↓69・4・16）への手紙が一緒に投下されたことは、ともに出てくる。

先導機の『アイスマン』は、観測用の気象ゾンデを落下傘で投下した。気象ゾンデもまたバンブキンによく似ていた。違っているのは、その内部にルイス・W・アルウアレツ博士から嵯峨根遼吉博士に宛てた降伏勧告文が入っていることだった。（『第三の原爆』）

『原爆不発弾』では、この手紙が殺人事件の重要な契機となる。推理小説の展開はさておき、作者・藤村正太は直接に「体験」したとして、次のように記す。

長崎に投下された原子爆弾の補助兵器が原爆不発弾かと疑われ、海軍の決死隊が捕獲におもむいたこと。そのなかに、オッペンハイマー博士から嵯峨根遼吉教授にあてられた、メッセージが一通はいつていたこと。メッセージは終戦時、佐世保鎮守府で焼却され、教授には届かなかったこと——。そこまではすべて、当時、第二十一海軍航空廠に配属されていた作者自身が直接体験した実話であり、それが事実であったことも戦後明らかにされています。（あとがき）

確かに、この手紙のことは、嵯峨根の『原子爆弾の話』（大日本雄弁会講談社、49・12）の「序——長崎の手紙」で触れられている。さらに詳しくは、『嵯峨根遼吉記念文集』（81・4）に収録

された「戦争を越えて」(初出「主婦之友」46・10)にもあるが、差出人はオッペンハイマーではなく、嵯峨根の欧米留学時代(35〜38年)の「三人の友」だった。

長岡半太郎の五男として生まれ、嵯峨根家の養子となるも、父親と同じ物理学徒の道歩んだ遼吉は、仁科芳雄などともに日本の原子核研究・開発の中心にいた。理化学研究所研究員や東大理学部教授にも就いたが、戦後四九年に再び米国に渡り、東大も辞めている。敗戦後いち早く出た『原子爆弾』(朝日新聞社、45・10)や、『アメリカ科学読本』(コバルト社、46・6 ラツキー文庫9)『原子力の話』(日東出版社、48・7)といった著書もある。藤村の証言にある「焼却」は、嵯峨根の記述には出てこないし、この経緯には、「原文」の存在を含めてまだ不明の事柄が残されているようだ。下手な推理小説よりも、私はこちらに興味を抱く。

さて、南里征典である。その長篇第一作は『獅子は闇にて涙を流す』(徳間書店、80・8 ↓徳間文庫版、85・12)、その続篇は『獅子は怒りて荒野を走る』(徳間書店、81・4 ↓徳間文庫版、86・7)で、南米アマゾンの密林奥地に建設された、原爆製造工場と核廃棄物処理工場にまつわる事件が、それぞれの物語を構成していく。ここでは、日本の有力新聞社Q紙のプエノスアイレス支局長・森村圭介と、アルゼンチン日本大使館の現地採用職員で元ブラジル秘密警察工作員の経歴をもつ津田譲二(Jorge、スペイン語ではホルヘ)が活躍する『獅子は闇にて…』を見ていく(『獅子は怒りて…』にも津田は物語の半ばあたりで登場する。森村は出ない)。

森村は長崎の被爆孤児に設定されている。重要な場面で、「黒いマリヤ」の記憶が甦る。なお、津田は、炭鉱閉山に伴うポリビ

ア移民の父とともに、南米に移住した過去を持つ。兄は、森村の前任者で原爆製造工場の取材途中で殺害されていた。

一面、瓦礫となった浦上天主堂。黒くすすけていた聖母マリアの彫像。坂道をよろめくように歩いていた馬たち。そして、ついに見つからなかった両親。——一九四五年八月九日、森村がまだ五歳の夏だった。風にはためいていたあの丘の上の棕櫚の葉のバタバタいう乾いた音だけは、いまでも耳にこびりついている……。(第一章「薔薇のタン」)

家族を失って一人で生きていかねばならない男は強くなかつちやいかんぞ、叔父はそう言った。古風な叔父は森村に自らの力に恃むことを教えた。教育だけでなく、筋骨の靱さを要求した。少林寺拳法と柔道、それに大学時代、少しばかりかじった馬術とクレール射撃、それが森村の青春時代の貧しい遺産のすべてだった。(第五章「仮面劇の行進」)

核ミサイル……。軍事炉開発競争、広がる死の灰。ふつと森村の脳裡にまつ白であつたはずの浦上天主堂の黒く煤けた壁とマリヤの彫像がよぎり、バタバタと風に鳴っていたあの夏の日の棕櫚の葉の乾いた音が激しくなつた。(第七章「記憶からの襲撃」)

……その衝動の底深い茂みにあつたものは、いつたい何なのか？ 森村にはそれが自分でもよくわからなかつた。

多分、それは浦上天主堂のあのまつ黒く煤けたレンガ壁と、聖母マリヤ像、パタパタとはためいていたあの夏の日の丘の棕櫚の葉の遠い記憶に、結びついているような気がする。両親と家族は、あの夏の日の閃光の下で殲滅させられた。(第

九章「華麗なる死点」

「日本の黒幕」有坂省吾と「ナチドイツの亡霊」フリードリッヒという「日独同盟」主導で企図された「美しい地平線」<sup>ベロ・オリゾンテ</sup>という暗号名で呼ばれる原爆製造計画は、有坂の口から次のように語られる。

「日本を一人前の国にすること。そう、日本を世界の一流レベルの核保有国の仲間入りをさせ、一人歩きできる国にすること。……日本はすでに経済的には大国となり、世界をリードする立場にある。だが、世界の平和と安定のために経済大国に見合うだけの貢献をしているかとなると、まだ何もしておらん。だから私は、東西の軍事バランスを崩さない範囲で核保有国となり、発言権をつよめ、そしてそれによる戦争の抑止力を身をもって示して、世界の平和に貢献すること、これが私の終生の願望だ。だが、日本国内ではまだ核開発とか原爆の製造とかは、正直のところやれん状態だ。残念ながら、外国でつくるしかなかった。それはそれで仕方ない。うまくいったら、それを日本にもちこんでもいいし、うまくいかなくとも遠くの森につないでおくだけでいい。とにかく日本がそれを作り、持つという実績を作って、安逸をむさぼっている国民に、本当の防衛と平和とは何かを考えてもらう起爆装置としたかった。……私は秘かにこのマンハッタン・プロジェクトを計画し、フリードリッヒの機関とはからい、ブラジルとアルゼンチン軍事政権の一部有力者を抱きこみ、原爆をつくるという共通の目的のもとに、ここにこうして結集しているのだ——」（第八章「亡霊たちの森」）

有坂は「日本を代表する大手企業、菱友重工業株式会社の代表顧問」だから、「日本の資本」も背後には結びついている。森村は、「いずれはやつてくるだろう日本の一つの意識の形体かもしれない」と考える。

確かに、二〇〇七年七月の参議院選挙は、与野党逆転ばかりが話題になつているが、比例区を重点に選挙運動を拡げた小政党には、看過できない主張を掲げたものがある。候補を立てるのは数度目になる「維新政党・新風」は、「核武装を真剣に考えよう」を大きく掲げ、国防の重点主張は、「日本の主権は中・朝・露の「核の脅威」に晒され風前の灯！独立国として当然の「核保有をふくめた国防体制」を速やかに整えます」だった（一九九八年の参議院選挙から国政選挙に関わつた同党が、いつから「核武装」の主張を掲げたかは調査未了）。

この政党への支持率がわずか〇・二九%で、議席獲得にほど遠いことなど、決して安心できる材料ではない。核保有論は、与野党を問わず、ところどころに見え隠れしているし、かの「郵政民営化」論の帰趨を顧みるならば、いつ一気に世論が進むとも限らない。「唯一の被爆国」などという平和主義スローガンが、どこまで通用するだろうか。

事柄はまったく相違するが、似た構造を持つのは「沖繩独立」論であろう。沖繩知事選において、マスメディアはその主張を掲げて選挙戦を闘つた候補者を黙殺したが、今のような政治情勢では、一定の支持があるのも当然だろう。知名度の高い候補者が立つならば、過半数の支持を得ることも不可能ではない（私は必ずしも「独立」論を無原則に支持するわけではないが、それは「沖繩」

人の自決権に属する。「日本国憲法」第22条の規定する「国籍離脱の自由」は、何も「個人」に限定する必要はない。それを拡大解釈と誹るなど、日本国家並びに、そこに属する「国民」は、恥ずかしくて出来るはずがない。

事実上、骨抜きにされている「非核三原則」（作らず・持たず・持ちこませず）は、国内的には通用しても、米軍の核戦略の傘下におかれているのだから、国際的には有効性を持たないだろう。

「国際貢献」などという空疎な言葉のもと、どのような政治方針が出てくるか予断を許さない。「国家としては何ら核武装したということにはならない」、「作らせて、あずけていて、いつでも使う」というのは、現実解釈として可能な範囲だろう。

そうした政治情勢を先取りした小説として、南里の連作長篇を読むことも可能である。一概に荒唐無稽と斥けることは出来ない。

ところで、物語の結末は森村・津田コンビの超人的な活躍によって、有坂・フリードリッヒの枢軸は倒され、原爆製造に協力していたウラジミール・ガモフともども、地下秘密工場は大爆発を起こして潰れる。ガモフは米国の初期原爆製造計画にも参加したロシア人原子物理学者で、「ソ連のアンドレイ・サハロフと双壁をなす現代科学界の」良心ともいえる存在」とされる。

ガモフは「戦後、自らの悪魔の所業を恥じ、リベラル派に転じて核兵器製造に反対し、この地球上からのすべての核兵器の廃絶をめざす運動をしている」。そのガモフの「理念」が最後に辿りついた計画は、次のようなものだった。

——一九八〇年八月六日、ヒロシマに原爆が落ちてから三年五年後の祈念の日である。その日、アタッシェケースに原爆

をしのばせた作員が二人、さりげなくワシントンのホワイトハウスにはいつて大統領執務室に忍びこむ。同日同時刻、別の二人の秘密作員がやはり同じようにしてモスクワのクレムリン宮殿に忍びこみ、ブレジネフ書記長に面会を求め。さらにもう一組の秘密作員が北京の華国鋒主席の部屋を訪れる。

世界三拠点におけるこの三組の秘密作員が同日同時刻に蜂起し、三拠点の指導者を原爆で脅迫し、各国が所有しているすべての原水爆、核兵器廃棄文書に署名させ、責任をもつて、それを実行させる……（第九章「華麗なる死点」）

夢想ともいえる「原爆クーデター」を、森村は「狂信的」と片付ける。ガモフはすかさず、「この世の中に原爆など作った科学者ほど、狂信的な人間はほかにおるまい」と、森村の言葉を借りて反論する。「毒には毒を」の発想は、「目には目を、歯には歯を」と同じく、素直なだけに終わりが無い。どこかで脱出しなければ、脱構築をしていかななくてはならない。

宇能鴻一郎・川上宗薫という「ポルノ小説」の大家は、いずれも福岡に関わりを持つ。ふたりに続く南里征典も、一九三九年福岡県宇美町の生まれ。あわせて「御三家」とも称されるが、「原爆落し」（石川巧「原爆とエロス」性の衝動」）＝「原爆文学研究」第4号、05・8（参照）まで相対化した川上に比べるならば、こと原爆に関しては、きわめてナイーブでオーソドックスな扱い方だ。もつとも、二作のあとに量産された官能小説に、「原爆」が扱われているか否かまでは、検証できていない。ただ、この扱い方を見る限り、その必要もないだろう。